

---

# Bloody Iris

翌檜.R n

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Bloody Iris

### 【Nコード】

N9795B

### 【作者名】

翌檜・R n

### 【あらすじ】

東西が分裂した国、独欧瑠<sup>ドール</sup>。光と闇が入れ混じる、混沌と混迷の世においての、悲哀なる、暗殺集団「ALICE」の・・・一人の少女の物語。 >>連載停止中<<

## プレリユード（前書き）

一度、大幅に変更しようと思いましたが、細部を変更して再び投稿するだけに至りました。

## プレリユード

「嘆きの壁」

そう呼ばれる政治思想の対立の元、独欧瑠国<sup>ドール</sup>を東西に分かつ、厳しく巨大な壁。

私は今　その上を走っている。

後方には、怒号を上げながら私を追って来る憲兵達。その距離の差は大きい、さっきからいくつもの爆発音が聞え、その度に私の側を何かが掠めていく。近年ドール国や、その周辺国家「邦州」で巻き起こっている工業革命、その軍需部門の産物である非雷管式のライフルで狙われているんだろ。

所詮、自らの能力を研鑽<sup>ひがし</sup>し様とせせず、ただ怠惰<sup>うっえ</sup>に上官の言いなりとなり、社会主義側から民主主義側へと亡命しようとする市民ばかり撃っている連中の腕なんて暗殺者統括機構<sup>アサシンスギルド</sup>の下位三級狙撃手<sup>デミドライクラス</sup>にも劣るけど、昔のように単発で弾が飛んでくるのではなく、連射制度が著しく上昇しているので当たりそうに怖い。

工業革命が起きて、日常生活がしやすくなったのはいいけど、仕事<sup>仕事</sup>がやりにくくなるのはなあ……………。

そう、心の中で溜息をついた私の目に眩い光が差し込み、思わず目を細める。

「見つけたぞ……ALICE！　聖独欧瑠国軍クレイ少佐殺害の罪状により貴様を逮捕する。なお、抵抗は無駄だ妙な真似をするようならば討伐する」

やや慣れて来た視界の先、そこには軍刀を腰に差した六人の憲兵が進路を阻むように展開している。その内の一人が出力の強そうな大型の懐中電灯を持ち眼くらましなんだろ、ずっと私の顔に当て

つづけてくる。

「ふん、しかし噂のALICEがこんな小娘とはな・・・」

私を見ながら嘲笑を浮かべる彼らを尻目に必死に脳内で情報を整理する。

「嘆きの壁」は、その対立の大きさを表すようにかなりの厚さを持ち、上は人が何人も行き来できる程の横幅を持つ。そして、高さは10メートルを越えており、さすがの私もここから飛び降りたら無事というわけには行かないだろう。

と、なればこの場を切り抜ける方法はただ一つ。

後ろをちらりと見やるが、だいぶ離しているのか憲兵が追って来る気配はない。私は、まず目の前の彼らを相手にすることにした。

幸い、この憲兵たちは装備しているのは軍刀だけらしいので苦戦することもないだろう。懷から、愛用のナイフを取り出し、構えるすると、憲兵たちは私が獲物を出したのを見てさらに小馬鹿にするように笑い出した。

「ククク・・・ALICEよ、貴様そのナイフ一つで我々六人を相手にするつもりか？」

にやにやと下卑た表情を浮かべる彼らの言葉に私は何も反応せずただ発する。

「権力を笠に、人民を虐げ悪行を尽くす凡愚なる東の貴族どもに媚び、へつらうあなた達の腐った剣になんて当たるつもりなんてない」  
その言葉と同時に憲兵たちの顔から笑いが消え去り、まるで獣のような敵意と殺意が剥き出しになる。

「小娘があ、言わせておけば！ 総員抜刀、ガキだからといって遠慮はいらねえ！ 全力を持って薄汚いこの暗殺者を始末せよ！！」

隊長らしき男の号令と共に、彼らは明らかに力と虚栄の威厳を誇示するためだけのきらびやかな装飾の施された鞘から、反り返る刃を持った剣を抜き出し、こちらに向けてくる。

「はぁッ！」

彼らのうち、一人が右から軍刀を振り上げ切り込んでくる。

しかし、その太刀筋は遅い。

その憲兵の斬撃は、私が半歩体をずらし空を切り、大振りで隙だらけとなったそいつの後頭部に思いつきナイフの柄を叩き込む。

「あが！」

獣の如き悲鳴をあげ、昏倒する憲兵。その様子を目の当たりにして一瞬ひるんだ奴に私は瞬時に近づき、腕を掴むのと同時に足を引っ掛け、バランスを崩させ全体重をのせてそいつの頭を地に叩きつける。

「ぐ・・・がつ・・・」

「デ、デルマン！ハイリンヒト！ 貴様あ！」

瞬時に仲間二人を倒されて、残りの4人の憲兵は軍刀でまるでフエンスングでもするかのように間抜けな格好で私を威嚇する。それに対して私は、何の躊躇もせずにナイフを構えて踏み込み、斜め上に切り上げながら刃と刃をはじき合わせる。

刃の乱舞　私はナイフ一本で4本の軍刀の斬撃の嵐を弾く。金属と金属が激しくぶつかり合い、爆せて火花を散らす視界の中、的確に彼らの持つ隙を狙い、纏うロープの懷に縫い付けてある太い「針」を抜き出して、それを投げつける。

その「暗器」に気づき一人は剣戟の嵐から抜け出すが、他の三人は命中した後、一瞬の沈黙の後に針の先に塗りつけてある麻酔薬に中てられその場に崩れいびきを上げ始める。

「ぬ、ぬうつうつ・・・！」

残った最後の憲兵は喉を鳴らしながら表情を引きつらせている。

「さあ、残るのはあなただけ」

私はそう言い、ナイフを手で弄びながら彼に近づく。

「く、くそおおおおおおおおおっ！！」

憲兵は雄たけびを上げながら、軍刀を一気に振り下ろしてくる。

私はその斬撃を難なくナイフで受け止め弾き懷に入り、驚愕の表

情の憲兵の耳元で呟く。

「オヤスミ・・・」

ナイフをかる方ではない腕ではない、もう片方の手に構える麻酔針を憲兵のから空きの懷に刺す。

「ぐ、ぐ、げえあああ、あ」

憲兵は、目を見開き苦悶に顔を歪めて倒れる。

「・・・ふう」

軽く、溜息をついた後に今しがた倒した憲兵を見やる。大の字に倒れる男の胸には深く、麻酔針が差し込まれていた。

私は、黙ってその憲兵の胸に手を当てる。

そこから伝わってくるはずの鼓動はなく、既に事切れていた。

「殺す、つもりはなかったんだけどな・・・」

そうつぶやいてナイフをしまい、側に有る街灯の方に視線を向ける。

「いるんでしょ、アル。出てきてよ」

すると、街灯の上の景色が歪んだかと思うと、そこから長身痩躯の男が現れた・・・あいかわらずどんな手品を使ってるんだろうなあ。

「強い麻酔作用をもつ薬が心臓に届けばそりゃ心停止するわな<sup>iss</sup>iss」

「うっ・・・べつにいいじゃない。仕事自体はきちんと滞りなく済ましたんだから。それよりもさ、ロープが何か貸してよ。早くこの壁降りないと憲兵が追いついちゃう！」

アル・・・<sup>アルフレッド</sup> Alfred・<sup>ロック</sup> Roakは、私の言葉に分かった分か

ったと苦笑しつつワイヤーを投げてくれる。

それは、彼が立っている街灯に結んであり、私はそれを伝い下  
下りる。

そして、私に続きアルが西ドールの首都、ベルファリンの市街地  
の石畳の上に降り立った瞬間、壁の上で憲兵たちの怒声が聞えてた。

「やば！アル、早く逃げよ！！」

「おう。っていうかもう逃げてるけどな」

「あつ！ちよつと、待ってよー！！」

そんな、会話を交わしつつ私たちは深夜のベルファリンの街へと  
走る。

何人にも姿を見られる事無く。

暗黒に紛れ。

闇に融けつつ。

これは、その小さき双肩に暗殺者という運命を背負  
い、そしてその双眸に血の宿命を宿した哀しき少女の物語である。



## 第1章「独欧瑠・ドール」

「……イ……レイ……L a i s s ・C l o v e r」  
レイスクローバー  
「ん……」

机に突っ伏して、昨晚のの仕事で奪われた睡眠時間を補給していたレイスは、呼び掛けの声に、のっそりと顔をあげる。

「起きたあ、レイス？」

「うん……ありがとうペトラ……」

レイスは未だぼんやりとする目を瞬<sup>しばた</sup>かせながら、起こしてくれた友人、ペトルーシユカ・リストに手を振り感謝の意を示す。

「あんまり良く寝てるから起こそうか迷ったんだけど、ほら……先生がすぐく睨<sup>にら</sup>んでる……」

そう言われ、レイスが前を見据えると、そこには教鞭を折りそうな程握り締め、昨晚の憲兵よりも殺気の籠った目付きで睨<sup>にら</sup>んでくる、歴史科の女教師が居た。

レイスは、その視線を真っ向から受け止める。

……… 完全な沈黙。

それを先に破ったのは女教師の方だった。

「クローバー、独欧琉国が何故東西分裂をする事となったのかを答えて見なさい。汎世界闘争と関連づけて」

レイスは、自分達中等部学生では少ししか習わない独欧琉国東西分裂と汎世界闘争の事を答えろという女教師に多少の嫌悪感を感じながらも、ゆっくりと口を開く。

「汎世界闘争………<sup>ファンタズマコリア</sup>世界に存在する、十一の大国と数多の小国が資本

主義側と社会主義側：俗に東西に分かれ争った戦争。この戦争で、ドール国がある邦州地方の国々はほとんどが西……資本主義側だったけれど、当時のドール国はそれまでの、『爵』の位を持つ貴族達が各々に与えられた領地を治め、さらにその貴族達の上の一人の皇帝が国を支配する、一種の封建領主制度であり、社会態勢は社会主義を取っていました。また、異邦人打ち払い令等、完全な鎖国もしていました。しかし、その鎖国のせいで、技術の進歩が他の国々に劣り、ドール国は大敗に喫しました。その後、東側でドール国と肩を並べる大国の中の大国『ジパング国』と、ドール国の他に邦州で唯一の社会主義国である『楼麻国<sup>ロウマ</sup>』も敗北し東側は完全に『星米』率いる西側に降伏しました。

その後、ドール国では資本主義による民主制度の風潮が高まり、遂にPG<sup>ファンタスマゴリア</sup>歴789年……汎世界闘争終戦から五年後にドール国は人民が主権を持ち、政は、人民の中から選挙によって選出される議員と、大統領と呼ばれる者が行う事になりました。しかし、それまで社会主義において、甘い汁を吸い続けていた貴族達は納得せずに信奉者と共に挙兵。そして、首都ベルファリンを東西に分かつ壁……ベルファリンの壁、又は『嘆きの壁』と呼ばれる物建造し、ドール国の東側で、昔同様の社会主義制度で支配をしています……。これでいいですか？」

レイスは、余計な突っ込みがこぬよう、レイスは女教師を軽く睨む。

女教師は悔しそうに教鞭を折り、砕き、「寝ないように」と呟き、黒板に教科書そのままの事を書き出した。

「相変わらず、すごいねレイスは」

「……別に。自分の知らない事を知るのは面白いだけ」

そう言い、レイス再び顔を伏せた。

「……じゃあ、なんでまた寝るのよ？」

レイスは、静かに答える。

「睡眠欲は、知識欲より強いから……」

後には、レイスの静かな寝息しか聞こえない。

教鞭の代わりに、チョークを盛大に粉碎した女教師を見て、ペトルーシユカは軽く溜め息をついた。

## 第2章「光の中に咲く一つの闇花」

午前の授業が終わった後、レイスはペトラやその他親しい学友達と共に、レイスが通う、ベルファリンの郊外にある私立中学校「トウインクル」の芝生が広がる中庭で昼食を取っていた。

「あ、そうだ。昨日さあ、またALICEが出たの知ってる？」

文庫本サイズの弁当箱をつつく一人の少女がふとそんな事を言う。

「えーそうなの！？で、誰がヤラれちゃったの？」

「今朝の新聞に書いてあったんだけど、東の軍隊のクレイって言う人らしいよ」

一人の少女が言ったクレイと言う名前にペトルーシユカは反応する。

「あ、そのクレイって人なら知ってるー。なんでも、有名な貴族の出身らしくて、いろいろと悪い事してても、逮捕とかできなかったらしいよー」

「ふーん、そうなんだあ。ねえレイスは何か知ってるー？」

「え？」

突然話を振られ、それまで忙しなく動かしていた箸から、卵焼きをポロツと落とす。

「ごめん、何だっけ？……あ、そうかALICEの事？。えーと、うん知ってるよ」

レイスは少し焦り気味に言う。

「え、なにになに？何を知ってるの？」

そう言われレイスはさらに焦る。

「え、あ、えーと、そ、そのクレイって人がやってた事とか？えーと……なんか、軍の上層部への賄賂とか、自分の気に入った女の人とかを、兵士を使って掴まえて、自分の家に監禁したりとか……」

「げ、本当？最悪。新聞に載ってた写真見て、結構格好いいと思ったのに」

「まあ、いい人ならALICEが狙うわけじゃないじゃない。それにしても、よくそんな事知ってたねえ、レイス。本当にあなた変わってるわよねー。今日の歴史の時間といい、その異常な弁当といい……」

そう言い、少女はレイスが膝に乗せる弁当箱を見る。

それは、広辞苑並の厚さ大きさをほこり、さらにそれが4段にもなっている。どう考えても、大人でも一人で食べれない量である。

「レイスのその小さな体にどうやって入るのかしら……」

ペトルーシユカがしみじみと呟く。

「うーん、ちよつとレイス立ってみて」

「うん……」

レイスは、重箱を芝生に置き言われたとおり立ち上がる。

レイスの年代の平均的な身長に対して、作られている、トウインクルの制服……それは全くレイスにあっていなかった。

袖からは手がでず、スカートはズリ落ちそうになるので、制服の下でサスペンダーで止めてあった。また、私服で街を歩こうなら、よく初等部生徒に間違えられる。さらに言うと、たまに制服でも友人達と共に居なければ間違えられる事がある程背が小さい。

「うう……背が無いのは言わないでよ……」

レイスはいじけつつ言う。

「無いのは背だけじゃないんじゃない？」

そう言われ、レイスは首をかしげる。

「ほら、ココとか」

そう言い、一人の少女がレイスの胸をペタツと触る。

そう、ペタツと。

「うるさいッ！！それを言わないでーッッ！！」

その叫びと共に、皆は笑い出す。

レイスもふて腐れてはいるが、それを嫌とは感じていなかった。

いや、逆にそれは心地良かった。

自分のような暗殺者がここに居られる。

幾度もその手を、なんの感情も無く、血に塗れさせてきた自分が表の世界に居る事が出来る。

それは、何よりもうれしい事だった。

故に、レイスは思う事がある。

『自分は、本当にここに居てもいいのかと。』

幾ら悪人と言えど、人が人を殺すのも『悪』である、レイスも自覚している。

だから、悪の一人である自分が闇である自分が、ペトルーシユカや、クラスの友人達と共に、『光』の中に居てもいいのだろうか。

何度なく考えるもその答えは浮かばない。

それに、レイスには約束があった。

『あの人』と交わした大切な約束があるから、私はここに居なければならぬ。

……レイスは、考えるのを止め、澄み渡る青空を仰いだ。

そして、誰にも聞こえないように呟く。

「ねえ……なんで私にここに行けって……学校に行けって言ったの……」

「前代「L」……<sup>ルーク</sup>Lukeさん……」

### 第3章「IVIS」

鎖国制度により、外国の技術がほぼ入ってこず、汎世界闘争では敗戦する事となったドール国は、現在では完全な開国をすると共に、積極的に外国の技術や思想、主義を取りいれていた。

そして、ドール国ではそれまで自国の力のみでしか生み出せなかった物の何十倍の物を生産する事が出来るようになった。

この、通称「工業革命」は、ドール国に大きな利潤を生み出し、またそれに呼応するように、技術という技術が進歩していった。例として上げるなら、声の振動を電子化し、離れた場所へと送り、それにより会話が出来る「伝話器」や、街灯。

それら、生み出された物が多ければ多い程、国だけではなく、国民も裕福になって行った。

しかし、それは表向きの話し。

社会主義から、資本主義へと移行した後、問題となったのは貧富の差であった。

今や、邦州で一、二を争う商業国家となった、ドール国の首都ベルフアリンの市街の裏通りにも、貧民街スラムが広がる。

そこには、表の明るい世界と違い、血と暴力が蔓延はびこ無法地帯である。

そんな、貧民街の一角を学校帰りのレイスは歩いていた。

歩きながら感じる、妬みと殺意の視線を黙殺し、レイスは、自ら



が住む「ネスト」と呼ぶ場所へと向かう。

ネストは、貧民街の中央にある。貧民街に入る事の出来る所からおよそ三十分当りの時間を要する。

レイスは、ふと不穏な気配を感じ、立ち止まり、後ろを振り返る。

そこにはボロボロの衣服を纏い、その手に正に『狂気』の象徴である、鉄パイプや、ナイフ、包丁等の凶器を携えている、幾人かの貧民が居た。

みな、カモが来たというような顔をしていた。

そいつらを一瞥し、レイスは、静かに溜め息をつく。

「あのさ、何したいのかはよく分かるけど、やめといた方がいいよ」

レイスはそう言うも、彼等はニヤニヤと笑いながら近付いてる。

しかし、レイスはそれを静かに見ている。

貧民が近付く。

レイスは見る。

貧民が近付く。

レイスは見る。

そして、貧民の一人がレイスに手を掛けようとした瞬間

いつは一回転した。

「ぐげがっ」

くぐもった悲鳴を上げる貧民。その側には一人の女性の姿があった。

ブロンドのロングヘアーに、絶えない笑顔。そして、メイドの格好。

おおよそ、貧民街には一番似つかわしくない存在がそこには居た。

「アイヴィスさん、お見事です」

レイスは、アイヴィス……Ivis・Tone<sup>トーン</sup>に手を叩き賞賛を送る。

しかし、アイヴィスは厳しい顔をする。

……笑顔を崩さず

「いい？レイスちゃん。貴女も「L」を担う者なんだから、人任せで災厄を回避するんじゃないで、自分で処理なさい。それぐらいならできるでしょう？」

「いや、久しぶりにアイヴィスさんの華麗なCQFを間近でゆっくりと見たかったんですよ」

そう言われ、アイヴィスは頬に少し朱をさす。

「レイスちゃんのCQFの方が可愛いわよ」

「いや、近接格闘戦闘術Close Quarters Fightingの技が、華麗はともかく、可愛いはないんじゃない……」

「あら、本当に可愛いのよー」

「もうやめて下さいよアイヴィスさん。照れるじゃないですかー」

そして、レイスとアイヴィスはひとしきり笑う。

そして、貧民達の方をジロリと見る。

「貴方達が、全身の骨という骨を粉碎されたいのなら来なさい」  
アイヴィスは間延びした声でそう言うと共に、側にあつた、鋼鉄製の排水パイプを目にも止まらぬスピードで殴る。

ごん

……と言う、音が響き、パイプが「く」の字に折れた。

「……これが、嫌ならこんなのもありますけど？」

顔を真っ青に染めた、貧民達に向かい緊張感の無い声で言い、ゴソゴソと懐を探る。

そして、取り出す真っ黒な球体。

その球体には、一本の短いロープが出ている。

アイヴィスは、そのロープを火打ち石を仕込んでいる指輪でこすった。

シュツ、という音と共にロープ……もとい、導火線に火が着く。

アイヴィスは、それをゆっくり、そう、その球体の危険性を本当に理解しているのか？と、思う程ゆっくりと、幾分か開けた場所へ投げる。

一瞬の沈黙。

刹那、スラムで大きな爆発音が響いた。

数多の人々が何事か、と見るなか、アイヴィスは言う。

「いいですか、皆さんこの子に手を掛けるような事があつたら……その方の人生は終わりますよ。……分かりました？」

アイヴィスは爆発の衝撃に吹っ飛ばされて、地面に転がっている貧民に向かい言う。

「ヒツ……わ、わかりやした……」

その返答を聞き、うんうんと頷くアイヴィスの肩をレイスがトンと叩く。

「アイヴィスさん、早く逃げた方がいいかも……」

そう、言いレイスは指をさす。

そこには、貧民街を管轄する警察官が、怒気を孕んだ目でこちらを睨みながら走ってきていた。

「あら、大変」

「いや、あら大変じゃなくて、さつさと逃げますよ!!」

そう、叫んだ瞬間レイスはいきなり、アイヴィスに抱き抱えられた。

「え? ちよつと...、アイヴィスさん??」

レイスの戸惑いの言葉に、アイヴィスはにっこりと笑いながら言う。

「それじゃ、逃げましょう」

「え、え?」

瞬間、アイヴィスは、レイスを抱えたまま、目にも止まらぬスピードで走り出す。

「ア、あ、ア、アイヴィスさん?! 早い!! ちよつと早すぎるうゝゝ」

しかし、レイスのその懇願は、笑顔ながらも、一種の意地悪さが見えるアイヴィスの視線であえなく却下された。

「きゃああああッ!!」

そして、たったの五分でレイスは、ネストへと着く事ができた。

しかし、何故だか、アイヴイスに感謝する気にはならなかった。

#### 第4章「無力なるは『想い』」

「お前等……いったい外で何やらかした？」

レイスとアイヴィスがネストの中に入ると、アルフレッドがピクピクとこめかみに青筋を浮かべながら、入り口に仁王立ちしていた。「お散歩に出ていたら、レイスちゃんが、貧民に襲われそうになっていたので、威嚇のために爆弾を使いました」

「……威嚇なら、CQFで充分だろう……。で、警察も来ていたみたいだが、顔やここに入ったのを見られてないだろうな？」

「多分大丈夫だと思う……。結構距離があったから、私達の顔は視認出来なかったと思うし、アイヴィスさんが、殺人的なスピードで逃げたから、ネストに入ったのも目撃されていないと思うよ」

レイスは、先程の事を思い出して、肩を震わせながら言う。

「はあ……。まあいい。さっさと入って作戦立案室に行け……。次の仕事の事を説明する」

大きく溜め息をつき、アルフレッドは、ネストの奥へと行く。

このネストと呼ばれる建物は、どこかの貴族が建てた、4階建ての建物である。

元々、ホテルかなにかにするつもりだったのか、一階にはロビーがあり、二、三階にはそれぞれ四の部屋があり、四階は、厨房や、様々な従業員担当の部屋がある。また、屋上もあり、屋上は今は訓練所となっている。

作戦立案室は三階にあるので、レイス達は階段を登って行く。

作戦立案室の中には、中央に大きな机があり、その周囲には、四

つの簡素なイスが置いてある。

また、机の隣りにはキャスターが付いている、ホワイトボードも置いてある。

「……………来たか」

すでにイスの一つに座り、煙草をくゆらす、サングラスをかけた男が言った。

「あ、E<sup>エデン</sup>DENさんだいま」

男……………エデンは、煙草を啜えながら、頷く。

「えーと、ミナちゃんは？」

レイスは、もう一人この場に居て然るべき人間を探す。

「ああ、神称<sup>カミナ</sup>名なら、今別の任務に就いてるよ。と、言っても暗殺じゃないがな」

アルフレッドは、ホワイトボードに資料を貼りながら言う。

「さて、皆席に着いてくれ。作戦会議を行う」

ALICEのリーダーたるアルフレッドの言葉と共に、レイスはイスに座る。

「まずは、言っておきたい事がある」

アルフレッドは、ある程度逡巡を含みながら言う。

「今回のターゲットは、明確な『悪人』ではないかもしれない」

「明確な悪人ではないかもしれない、と言うと……………」

アイヴィスが不思議そうに言う。

「……………実はな、この依頼は、俺達ALICEに資金保証や、その他様々な援助をしてきている、エリウッド・アラン衆議員からの依頼なんだが、その標的というのが、アラン議員の政敵である、リスト議員なんだ」

『リスト』……………その名を聞き、レイスが勢いよく立ち上がる。

「待つて！リスト議員って、デイン・リスト議員！？」

「そうだが……………どうかしたのか？」

レイスはうなだれながら言う。

「その人……私の学校の友達のお祖父さんなの……… いったい、デインさんは何をしたの？」

レイスは、数週間前ペトルーシユカの家の晩餐に招待されたのを思い出す。

その時に会った、ペトルーシユカの祖父である、デイン。

レイスは、彼の朗らかで優しく、そして自らの弁を以て、悪を撲滅させたいと語った人柄をとても気に入っていた。

「アラン議員から渡された資料の中には、選挙のために、マフィアや、多数の企業や、政治権力者に多額の袖の下を…… 賄賂を渡し、また街のゴロツキを使い、対立する議員を襲わせているらしい」  
そう言い、アルフレッドはエデンの方を見る。

「……… 賄賂云々はともかく、確かにリスト議員に対立する議員が、ここ数週間の間に四人も襲われている。うち、一人は頭を鈍器で殴られ意識不明の重体にある」

「そ、そんな……」

絶望にうちひしがれるように、言葉を紡ぐレイス……。そんな、彼女にアルフレッドが言う。

「しかしだ。俺とエデンで調べた所、賄賂にしろ、議員が襲われている事件にしろ、きちんとした証拠があるわけではない。全ては空想の域を出ない」

「まさか…… アラン議員は……」

レイスのその言葉に含まれる意を汲み取ったアルフレッドは、頷く。

「……… 全ては、アラン議員がリスト議員を暗殺するためのシナリオなのかもしれない」

刹那、レイスは机を思い切り叩く。

「なにそれ！？たかが政治の思想で対立してるだけで、相手を殺すの？……… そんなの許される事じゃない！正義を誰よりも尊ぶ存在で



ある私達ALICEがすることじゃない!!」

「そうだ……。許される事ではない。だから、今回の仕事は、ALICEがやったのでは無く、マフィアがやった事にする。幸い、リスト議員はマフィア廃絶に力を入れているからな」

「アル?! 何言ってるの! そんなのは、正義じゃないよ!!」

「黙れ!!!」

突然のアルフレッドの一喝に、レイスは声を失った。

「……………思いだけで……………何ができる。いいか、俺達はギルドとは違い、非合法の暗殺者だ。だから、俺達には権力を持った後ろだてが必要なんだ。」

この依頼、全てがアラン議員のいように仕組まれていたとしても、我々ALICEはこの依頼を断ることはできない。もしも、俺たちがこの依頼を断ったなら、アラン議員は即座にも俺たちへの援助を止めるだろう」

「そうなった場合……。俺たちがしてきたこと……。エデンさんや、先代のALICEのメンバーがしてきた事が全て無駄になるんだ。……。だから、この以来は完遂しなければならない」

「

そして、大きくため息をつき、アルフレッドは言う。

「せめてもの情けだ。今回の依頼はお前は、出なくて……………」

「

「今回の仕事はレイス、お前が対象を暗殺するんだ」

アルフレッドの言葉を遮り、エデンが断固とした口調で言う。

「エデンさん?! レイスの友人の祖父が対象なのですよ? . . . . .  
もしも、それでレイスが失敗したら . . . . .」

「. . . . . その時は、どうなるかレイスも、お前も分かっているだろう」

サングラス越しに、エデンが鋭い視線でレイスを睥睨む。

「. . . . . 失敗は . . . . .」

レイスは、茫然自失と言った状態で、言葉を紡ぐ。

「失敗は . . . . 死あるのみ」

## 第5章「Operation dry justice」

レイスが、アイヴイスに支えながらも、おぼつかない足取りで、作戦立案室を出て行ったのを見届けた後、アルフレッドは煙草を吹かしつつ、窓の外を眺めるエデンに言った。

「何故、レイスに暗殺をさせるのですか？！あの様子では、失敗するどころかへたをしたら逆に殺されるかもしれません」

エデンは、フウ、と煙を吐き出す。

「……確かに、リスクは大きい。……だが、アイツは暗殺集団ALICEの一員であり、『L』の字を継承する者だ。我々一人一人の能力は、ギルドでは、グランドアインス特位一級レベルの力を持つ暗殺者だ。その、トップであるべき暗殺者が、情に惑わされ、標的を仕留め損なう事はあってはならない。……これは、アイツにとつての試練だ」

そこで、一度言葉を切り、煙草を吸いまた言う。

「俺は、最初に言ったはずだ。ルークのあの『遺言』……アレは、恐ろしく酷いものだ。……悪いんだが、俺にはルークの意志を読めない。……何故、暗殺者に情が与えられるような所に行かせるのか？……」

エデンの吐く煙は狭い室内に、所在なさ気に、漂っていた。

そして……夜。

レイスは、仕事用の様々な武器を収納したり、銃弾や衝撃の威力を緩和する特殊な服を着て、その上から、漆黒のローブを羽織る。

未だ、その胸中には片付かないモヤモヤが渦巻いていたが、それを「使命感」で押し殺す。

「……レイス」

レイスと同様に、闇色のローブを着込むアルフレッドが、顔を伏せながら言う。

「無理はするなよ。……いざとなったら、標的は俺が始末する」

「……ううん。大…丈夫。これは、私がやらなくちゃ、いけない事だから……」

自己欺瞞に満ちる、その言葉を吐いた後、レイスは愛用のナイフを目の前に翳し、祈るように目を瞑る。

数秒後、目を見開いた時には、レイスの目は「暗殺者」の色彩を放っていた。

感情は、無く。それ故、情は消える。

只の、暗殺機械がそこにあった。

……その晩も、静かだった。

最近多発する、議員襲撃事件を警戒して、リスト邸に配備された憲兵達は、普段なら絶対しないような欠伸すら今日はしていた。

リスト邸の門を警備する、若き憲兵フラッソ・マニアンもその一人だった。

「ふああ…っ」

「おいおい、フラッソ。班長に見つかったら、大目玉だぞ。真面目に勤務してねえって」

彼と共に門の警備に就く、同僚が言う。

「しゃーねーだろ。暇なんだからよ。てゆーかさ、議員襲撃事件の被害者って、リスト議員の政敵ばかりだから、犯人はリスト議員かもって説が出てんだろ？じゃ、ここで警邏<sup>けいろ</sup>なんかしてるの無駄じゃないか？」

「本当に、リスト議員が襲撃事件の黒幕だとしても、きちんと証拠をつかまない限り、犯人って決められねえよ」

「あー…面倒<sup>メンドー</sup>。……どうせ、班長は邸内警備だから、バレないだろ。煙草吸おー」

フラッソは、そう言いながら、ポケットから煙草の入った、ケースを取り出し中から一本煙草を取り出し、口に咥え点火器ライターに火を付ける。

ライターの火が灯った瞬間、フラッソの目の前で「何か」が煌めいた。

「あ……」

「ん？どうした、フラッソ？」

同僚は、そう呼びかけるが返事はない。

代わりに、フラッソの口からポロッと煙草が落ち、その直後首もが落ちる。

「なッ！？て、敵しゅッ………うゝあ」

同僚が、携えるライフルを構え叫ぼうとしたが、その口は途中で塞がれ、首にいつの間にか巻き付いていた鋼糸が、彼の首をも地に落とす。

「………二名排除。皆解っているとは思うが、憲兵は東西どちら共に協力をする節操のない『東西統合共和戦線』の連中だ。始末しても構わないが、邸内の人間はなるべく殺すな。……しかし、顔を見られた場合は……必ず消せ」

血濡れた鋼糸を巻き取りながら、アルフレッドは皆にそう言った。

## 第6章「影溶・前編」

レイス達は、邸内に侵入してからは、各々が事前の作戦通りに、独自で行動をしていた。

エデンは、邸内中庭の憲兵の始末。アイヴィスは、リスト邸のメイドに扮し屋敷の使用人等を薬で眠らせ、騒がれない様に。アルフレッドは、邸内警備の憲兵の始末。……そして、レイスは標的である、リスト議員の抹殺に……。

薄暗い邸内……。先行して入った、アルフレッド・アイヴィスのお陰で、レイスは人に遭遇せずに済んでいた。

「……………」

納得したつもりであった。

しかし、やはり何処か割り切れないモノが……わだかま蟠りが、胸中には渦巻いている。

『世界戦争は終結し、ファンタズマゴリアの乱れは治まりつつある……。しかし、未だこの国は、東西の分裂という内乱でアサシンスギルド乱れている。また、その混乱に乗じて、暗殺を生業とする暗殺者統括機構等というものまでが生まれている……。国の大三原則に「平和主義」……他国に侵略せず、又侵略させずというスローガンを掲げる我が国にその様な機関が存在してはならないのだ……！』

デインの言葉が、レイスの頭の中で、蘇る。

その言葉や、デインが理想とする、完全平和の世界の話を説いている時、レイスは自らがデインが、最も忌み嫌う下手人という事を忘れ、熱心に聞いていた。

滑稽かもしれない。しかし、レイス自身デインの理想とする世界が見てみたかった。

彼の夢を自分も実現させたかった。



……しかし、運命はレイスを認めない。  
まるで、レイスが血に塗れた世界でしか生きる事が出来ないのを  
表すが如く。

「……ね」

そこは、デインの寝室の前。  
レイスは、震える腕で扉を開く。

その頃、アイヴィスとアルフレッドは、邸内で合流していた。

「あ、アルさん。首尾はどうですか」

「アイヴィスカ。こちらは、全ての憲兵を消した。そっちはどうだ  
？」

「私も大方の使用人達とターゲットの家族を深眠させました。……  
ただ……」

「ただ……何だ？」

「レイスちゃんが言ってた……友達、の、ターゲットの孫、ペトル  
ーシユカ・リストの寝室が見当たらないんです」

「何……どこか見落としたんじゃないのか？」

アルフレッドは、有り得ないと思いつつも、そう口にする。

「いえ……きちんと屋敷の隅から隅まで捜しました。ターゲットの部  
屋以外は、ですが」

アルフレッドは、もしやの場合を考えて、渋面になる。

「まさか…な」

数多の本棚が壁に並び、部屋の中央には、ディンが眠るベッドがある。

レイスは、ディンと自分以外に誰も部屋に居ない事を十分に確認し、ディンの元へと足を進める。

今夜は、満月。

月明りが、窓から部屋に差し込み、ディンの顔も照らされる。

天蓋付きだが、絢爛な装飾もなく、どちらかと言えば質素な感じのベッドに眠るディンの顔は青白い。

「え…?」

レイスはそんなディンの顔を見てある事に気づいた。

青白い　　青白過ぎる。また、生気が全く感じることが出来ない。

そこに眠るのは只の人形のように、生物としての気配がない。

そして、極めつけに、レイスはディンの胸が上下していない事に気づいた。

「あ…ああ…ディン…さん！」

その事…に気づいた瞬間、レイスはディンの元に駆け寄る。

レイスの想像通り、ディンは既に事切れていて、その肌は氷の彫刻の様に冷たかった。

「な、なんで…」

自らが暗殺する間に死んでいたディン。レイスは疑問を宙に投げる。

「クク・・・」

「ッー!!」

ディン以外は居ないと思っていた部屋に突如として、真後ろから声と共に気配と殺気が出現し、レイスは振り向くと同時に身構える。そこに、一人の男が壁にもたれ掛かるようにして居た。

頭には、黒い頭巾を被り、口元と顎の部分を盗賊の様に布で三角に隠しており、その体には灰色のローブを纏っている。

見るからに男は、レイスと同じ裏稼業者・・・暗殺者だった。

「天下のALICEがこんな小娘で、そのうえ標的の死を悼んでやる。・・・これは、傑作だぜ」

「誰!？」

男は、壁から離れ部屋をゆつくりと歩き出す。

アサシンスギルド

「暗殺者統括機構所属、A級暗殺者、グレイル・ペンヴァー」

そう言った男の腰には、血に塗れたナイフが妖しく煌めいていた。

## 第7章「影溶・中編」

「グレイル・ベンパー……まさか、かけつけ影溶のベンパー……！」

近年、裏業界で著しく名を上げている、暗殺者『グレイル・ベンパー』。

彼は、『影溶』と称される、自らの姿を影に隠す事の出来る不思議な暗殺術を持ち、ギルドの若手の暗殺者の中ではトップクラスのスキルを持つ者である。

「何故…何故なの！なんで、ギルドの暗殺者がディンさんを……！」  
レイスは怒りに震え、大声で叫ぶ。

その様子を見て、グレイルは更に嘲笑する様に薄ら笑いを浮かべた。

「おやおや、暗殺者がそんな大声だしてどうするんだ？屋敷の使用人どもが起きるぞ？」

「使用人は今、眠らせている。ちよつとやさつとじゃ起きないように、深くね」

「ほーう……」

相も変わらず、グレイルは薄ら笑いを絶やさない。

その態度に、レイスの苛立ちは募る。

「ねえ、なんでなのよ！なんでディンさんを殺したの……！」

「なんでって……なあ？暗殺者が人を殺す理由。……そりゃあ、そいつが標的だからだよ。それにだ、見るとこお前もそのジジイの暗殺をしなくちゃならねえようだが、お前は気が進まないらしいな？そんなお前に代わって俺が始末してやったんだ。感謝の一言ぐらい言ったらどうだ？」

「こいつ……ふざけるなあっ！」

レイスの怒りは頂点に達し、懷よりナイフを引き抜きグレイルに

切りかかる。

「ひゅーっ、熱いねえ」

力は込もっているも、怒りに任せた攻撃程、隙が生じるものはない。

グレイルは、その場から一步も動く事なく、上半身を傾け、斬撃を難なくかわし、空を切ったナイフを持つ、完全に伸びきったレイスの右腕にナイフの柄を叩きつける。

「あぐっッ……！」

肘にめり込むように叩かれた打撃は、レイスのか細い腕を叩き折る。

「おお痛ぞ。御愁傷さん」

まるで、今の攻撃すら完全に他人がやった事：そう思えるぐらいに、他人事のようにグレイルは、激痛に膝をつくレイスに言う。

「う、うあああああッ！」

神経を逆なでする、グレイルの言葉にレイスは更に憤り、折れていない左手でロープのポケットから、手投げ用の小さなナイフを数本取りだし、それを腹の辺りに水平に投げる。

しかし、グレイルの姿はナイフが当たる直前に雲散霧消し、その後ろの壁に横列をなして突き刺さる。

「影に、溶け……た？」

窓から入る、朧な月光。

それは、レイスに視界を与えもするが、部屋の家具から伸びる影をも生む。

痛い程の静寂が、レイスの耳を突き、えもいわれぬ恐怖が自然と震えを誘う。

いつ、どこから敵が来るのかが解らない……そんな状況に陥った事のない、レイスは錯乱した。

「うわあああああッ」

闇雲に周囲の影という影に、ナイフを突き立てる。

しかし、幾ら影に攻撃を加えようと、実体を持たない影に刃が刺さる事はなく、床の絨毯を引き裂き、家具に穴を穿つだけである。「っ……はぁ……はぁ……はぁッ……なんで……なんでっ」

部屋中の影を攻撃してもグレイルの姿は見つからない……否。

レイスは、周囲を警戒するがあまり、自らの下に注意をする事は無かった。

……レイスの足元から伸びるその人影。その顔に当たる部分。そこに、歪みと淀みが生まれる。

妖しく輝く、影の半月の様な赤い口。

僅かな、気配をようやく感じとり、振り返った瞬間　　レイスの眼前に敵の刃は迫っていた。

レイスの背から漏れる、月光を反射する、既に紅く染まった刃。

僅か、一瞬ながらも、レイスにはその時全ての動きがゆっくりに感じられる。

死ぬ……

死ぬ……

だめ……

避けなきゃ、死……ぬ

避けなきゃ、だ……め

やだ……

やだ……やだ……

やだ……やだ……や……だ

やだやだやだやだやだ……いやッ！！死にたくない！

押し潰されそうな恐怖から逃れるために、レイスは眼を閉じ、現実を否定し、生への執着を、幾度も心の中で反芻する。

……そして、その祈りが通じたかどうかは解らないが、予想をして

いた痛みは生じる事はなかった。

レイスは、身構えながら、恐る恐る、瞳を開く。

瞳より、僅かな距離に、刃の先端がある。

そのまま、あと少し押し込めばレイスの目を貫くであろうに、グレイルの操るナイフは静止していた。

……正確には、真後ろからグレイルを締め上げる、アルフレッドによって、静止させられていた。

「アル！」

「せやあッー！」

アルフレッドは、グレイルを床に叩きつける様に、組伏た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9795b/>

---

Bloody Iris

2010年10月15日22時18分発行